

2024年5月26日 説教「キリストとの出会い」

使徒の働き 22章1～11節

ペンテコステ礼拝を過ぎて、再び使徒の働きの学びにもどります。パウロがエルサレムにおいて、危うく命を落とすところ、千人隊長に守られ、あまつさえ人々の前で話す時まで備えられました。

1. 宮の外に引きずり出されたパウロ (1～3節)

①扇動するユダヤ人達 (1)「兄弟たち、父たちよ。いま私が皆さんにしようとする弁明を聞いてください。」

パウロは城壁の段から語りました。まずは「兄弟たち、父たちよ」と呼びかけました。彼は人々に弁明をする、といっていますが、自分がどんな者で、どのような歩みをしてきたかを率直に伝えようとしていたのです。特に、彼に対して敵意を持つユダヤ人たちに弁明したかったのです。

②エペソ人トロピモが (2)「パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった。そこでパウロは話し続けた。」

パウロは千人隊長に対してはギリシャ語で話しました。しかし、今ユダヤ人に対しては、ヘブル語で語りかけました。ユダヤ人たちは騒ぎを止めて静粛になり、パウロの話しを聞こうとする態勢に入りました。

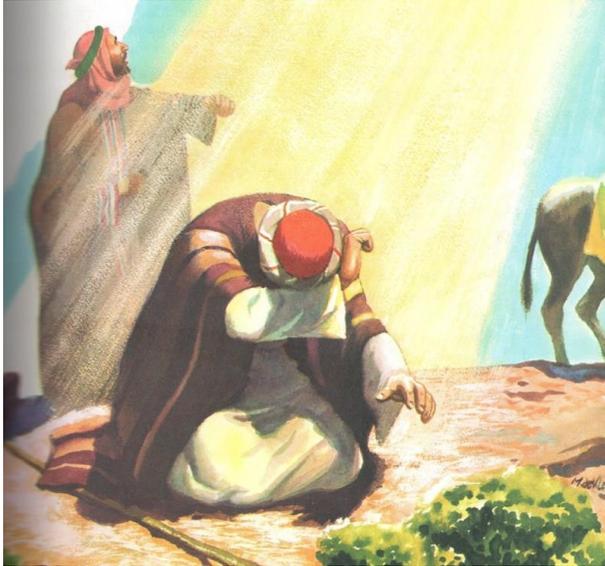
③パウロは捕らえられ (3)「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」

彼はその出身から伝えます。彼が生まれたのは、小アジアの東側の地中海沿いの町タルソでした。離散の民としてそこに生きるようになったユダヤ人家族の一人でした。外国であるとはいえ、彼はユダヤ人としての教育を受けました。それも徹底的なもので、ガマリエルという優れた律法学者について、律法を詳しく学び、それを実行せんとする気概においては、目の前のユダヤ人たちにいささかも劣ることはなかったと証しました。

2. 殺されかけたパウロ (4～7節)

①駆け付けた千人隊長(4～5)「私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまで至らせたのです。このことは、大祭司も、長老達の全議会も証言してくれます。この人たちから、私は兄弟たちへあてた手紙まで受け取り、ダマスコに向かって出発しました。そこにいる者たちを縛りあげ、エルサレムに連れて来て処罰するためでした。」

パウロは彼がどれほどユダヤ教徒として熱心であったかを伝えます。つまり、彼はキリストを知る前には、キリスト教徒を迫害し、男女を問わず牢に入れ、死に至った人もあったということです。これは、当時彼を統括していた大祭司、長老達、議会の人々も証言も得られることと、彼らから指令を受け、ダマスコに向かったのだということです。そこでもクリスチャンた



ちを捕縛し、エルサレムに連行して処罰するつもりでいたことを述べたのでした。

②鎖につながれたパウロ (6)「ところが、旅を続けて、真昼ごろダマスコに近づいたとき、突然、天からまばゆい光が私の回りを照らしたのです。」

ダマスコのクリスチャンを取り締まることに燃えて進み、もう町が見えてくるだろうという時です。突然としてまばゆいばかりの光が、パウロの回りを照らしたのです。真昼間なのに、光は圧倒的でした。そこだけが、別世界であるかのようでした。

③かつがれたパウロ (7)「私は地に倒れ、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞きました。」

パウロは地面に倒れ込みました。すると声が聞こえました。「サウロ」という呼びかけですが、パウロのヘブル名です。「あなたはなぜわたしを迫害するのか」とその方は言われるのです。

3. 千人隊長の許可を得たパウロ (8～11 節)

①ギリシャ語で (8)「そこで私が答えて、『主よ。あなたはどなたですか』というと、その方は、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ』と言われました。」

パウロは思わず『主よ』と言ってしまいました。それほど権威に満ちていたからです。『あなたはどなたですか』とたずねると、なんとその方は「あなたが迫害しているナザレのイエスだ」というのです。クリスチャンを迫害してきたとしても、イエス・キリストに直接危害を加えたとは思っていなかったのですが、心にズキンとききました。

②ローマ市民です (9～10)「私といっしょにいた者たちは、その光を見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした。私が、『主よ。私はどうしたらよいのでしょうか』と尋ねると、主は私に、『起きて、ダマスコに行きなさい。あなたがするように決められていることはみな、そこで告げられる』と言われました。」

あのまばゆいばかりの光については、パウロの従者たちも確かに見たのです。しかし、パウロが聞いた主の言葉については、聞き分けることはできませんでした。彼は続けてたずねました。「主よ。それなら私はどうしたら良いのでしょうか」。ここにおいて、パウロにとって、イエスはすでに『主』になっていました。主のお答えは、起きてダマスコに向かいなさい。そこで、これからのことは告げられる、ということでした。

③話を許されたパウロ (11)「ところが、その光の輝きのために、私の目は何も見えなかったもので、いっしょにいた者たちに手を引かれてダマスコに入りました。」

この時点でパウロは、あの光のゆえに目が見えなくなっていました。従者たちに助けられて、ダマスコまでの道を行くしかありませんでした。

《結論》 人生には思ってもみないことが起きます。パウロにとっては、ダマスコ途上にある時までは、反キリスト、反クリスチャンでした。それもクリスチャンを懲らしめることに燃えていたのです。ところが、その彼が一瞬のうちと言っても良いように、キリストを主とする者となったのです。回心したという表現が使われることがあります。180度、人生の向かう方向が変わってしまったのです。パウロの場合は、誰がどう考えても、それは神の一方的な召しというしかないでしょう。つまり、パウロの側にキリストに従おうとする心や、キリストに惹かれる思いがあったわけではありません。むしろキリスト教を弾劾し、それをぶち壊してしまおうとしていたのです。そのパウロが救われて、キリストを信じるようになったのですから、これはもう特別な神の恵みによるというしかない出来事でありました。パウロ自身こう述べています。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」(エペソ人への手紙 2 章 8～9 節)

もっとも、多くのクリスチャンにとっては、パウロのような劇的な回心を通して信仰をもったという例はあまりないでしょう。時にはあのアウグスティヌスやジョン・ニュートンのような、回心の機会を得る場合があります。しかし、多くの場合は、御言葉を学びながら、自分の罪を認め、福音を知らされて、キリストの十字架と復活を信じるに至ったということになるでしょう。私の場合などは高校二年生の時に、洗礼を受けることを勧められ、その準備もしましたが、キリストの十字架と復活の意味もよくわからずに信じ、洗礼を受けたという具合でした。そのおよそ3年後に自分の罪を神の前に告白して、実質的なクリスチャン生活が始まったというのが実際のところでした。それまでもありましたが、大きな最初の出会いはその日でした。

キリストとの出会いというのは、「こんにちは、良いお天気ですね。」という付き合いで段階ではなく、たとえですから当てはまらない面もありますが、キリストとの結婚の約束を結ぶということにもなりましょうか。その契約では、キリストからは恵みをいただきますが、私達の側でもこの方にかける、この方に任せるという面が大切になってきます。「こんにちは」という関係から始まって、時間を経て、ついにはこのたとえていうところの結婚に至るケースもよくあります。また、割と早くからこの契約関係になることもあります。

このような賛美歌があります。「神なく、望みなく、さまよいし我も、救われて、主をほむる、身とはせられたり。われ知る、かつてはめしいなりしが、めあきとなり神をほむ、いまはかくも」(聖歌 451) この人は、希望もなくさまよっていたのに、思いがけなくもキリストと出会って、キリストを賛美する者となったのです。かつては何も見えなかったのが、今は信仰によって見えるようになったと証しています。

思いがけないキリストとの出会いは、クリスチャンになった後もあるかもしれません。キリストに出会ってこそ、私達は福音の意味の深さを次第に知っていくのです。主イエスの前に出て、新たなる出会いを与えていただきましょう。